朝夷巡嶋記

第二編

巻五

へ 13
704
10

明治文庫
706
10

鷹巣先生著
名和料理書
新選普通作文必用
中本 全二冊
右書ハ頭書作文類語數多ク揚ゲ本文ハ日用文ニ皆々短文ニ綴リ小學兒童ノ作文一助ニ書リ且ハ商家ニハ必ラズ便用ニ可相成珍書本也江湖諸君購求アランヲ知リ玉可シ何方ノ本屋ニモ有外御求被下候
書肆 文榮閣 大阪北久寶寺町四丁目十八番地 前川源七郎

明治三十八年十月十日購求

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之五

東都 曲亭主人編輯

初輯第十九

野干玉の黛燭
蘓弥深の袖巾

八嶋室平師住八爰秀ヨ投折ゑれてゐゞ刃ヲ起とかゝつ孤。ゐ淫兵卒ハ
駁あ了ゑさゑとゝもとゝ〻ぞうゑよ志ゑ激ーて旬言ハ〻ゝ天地ヲ敲ゑ。ゑ
者共ゝ。なゞて虚乱ゝ熟視てゐ縱朝夷ゑ〻ゝて鬼神ハよもあゝじ。
ゑれゑハゑも怪発て歩行不自由ゐゝめゝゝ。軍配ハゑ裏よあゝ掛ゑや
ゝれと敦南ハ駁ゑ有理と見ゑゝ。ゑの勢を憑む群雀。黍の刈穂ハ
著ゞく。咄と嘯て驚て蒐れバ。ゆゝくーやと美秀ハ數ヨ添ゝろ杉の立木を。
根投ヨ丁と引抜ゑく。搞妃ゑせ難倒ー。縱横ゑ礙ヨ拉けバ廣光も亦刃を

うち振り。追立追詰攻戦入いとも烈し。抜刀風勇力。當るべうもあらざれば。四五十人の雑兵們半ハ矢庭に命を隕し半ハ地上に打居られて。堂あハーて。拝むのミ平張伏て長吠せり。義秀呵々と冷笑ひて。彼大木を礫と投棄て生よ。勧解おバ晋也。さのミハ亟益の殺生あらんさられあの室平奴ハ。ゆゆしく死。癖者とおもふ。来よと。跳懸て。宙よりー提て。廣光がほとり近く撲地と推居。汝ハ罪裏よト。縛庵やく。飽まで。これを挾せしが。いかふまが本事をきやつ。汝ハ民を虐げ。私欲に耽るものあるバそ。亟頼の時夏と。損資てをきく。領主の驪を暗ま。逆徒五頭平が。詐言を幸ふして。温順の君子ら。義邦を。捕ん。とも。是甚麼なる道理ぞや。これ幾遍抜時夏を。凋殺さんとすれども。義邦の面に覿く。故ー。死ぬを知らざるや。今亦汝を殺さ。鼠を。殺よ。是一般。雖然。汝がごとき。則民の蠹毒。低弱不具のものを。虎を深山に。似ん。且く。苦痛を忍べー。と。罵懲して。腕を捺ぬ。腰骨を蹂躙ば。室平ハひと泣く。声霜夜の虫より細く。うけ。義秀ハさもこそ。項上凋て。起し。汝ー。先非を。ハ。吉見冠者に罪おきすを。左典厩へ。義兼を。以。ぬ。時夏が。ト。縛に。與し。密書。あるよ。汝ー。先非を。ぬ。ぬ。時夏が。隠慝を。顕せ。然ぞハ。又。義秀に。来て。汝が。首を。引。抜。骨。ふ。覚よと。再三。呵責て。数の中へ。礫と。投入る。又。雑兵を。撞。捆て。貪竹叢へ。投入る。よ。る。蹤。を。弄。死。る。めさ。迷。ぬ。師任が。徒を。数の中へ。隠。義の。追兵。出。遅。の。隙に。廣光を。扶。封彊を。出。後。を。謀。る。べ。当下。廣光ハ。恭。義秀に。再生の。恩を。拜謝。躯て。宿所に。伏。義邦ハ。井平。共。倍加。北を。投。脱。義。緯の。趣を。告。義秀。これを。聞。あ。ぞ。おの。ハ。故。ありて。これを。昨夜。ぬ。これも。告。妃。ぬ。あ。る。

燕居安坐のと紀るゝねバとく禍を避るとそ。肝要あるめ。血よ染くる衣をつゝ飽まで食して走るもあへとゝのよ廣光おろゝぬて酒食をとう出て美秀と共よたらゝく。割籠さ〻准備つ遽しく衣を脱更姿を窶し笠をふかく両人夜一宿所を出るバ美秀ハ先よ立て大石山ゆゞとけ入りぬ。そのと紀廣光袂を掖て某ハ妻とゝもを赤貝まで半〻お紀るいふせまゝと不樂しらよ密語。うち微笑こゝのとの心安うれ某昨夕ハゞよ赤貝の郷ゆゝて浅良井ゞ。對面せゝ。これハ上野のゝとより来つ婦人ゝ人よ伴ひてその家よ入らんとせゝと紀。灯光よ面をあゝつ。送よ呼けゝあゝれ。軈てその奥よ聚會て五頭平ゞす。時夏ゞ奸計冠者ハ井平ゞ資よゝて共よ北国を投て脱去らんと甘らしゝる。浅良井どのよこれを伺特よ彼〻太郎とゆゝんいと精悍紀めゝゝへつれバゞ肺肝を説示して。おづちの親苗四郎ゆゞ亡骸を葬せ迦婦人稚児よゝ太郎

傳げてその夜の中よ越の中州婦員岩神の里正ゝ稲向判五許遣ゝこの稲向ハゝの某と舊縁あゝ曩ゆ某加賀の小松へ越くれ菌様くのゝあゝて不憶もその文兄友鶴ゞ危窮を救ひて恩人一三とゝるめよき環會媒妁せゝし辞ゝたゝよなく。友鶴を娶ゝて。岩神ゆ歩を駐めてこの春を迎へ紀。ゝて某消息七和慶の内室子息のゝへを判五友鶴ゆよ憑遣ゝゝ心安く思ひ也只心ゆと紀吉見ぬゝの往方を佐味笠内高利ハ鶏倉殿家よ召使れて今ハ加賀よハゝそなゝぬ。と紀ゞゝて遥と北国へ赴紀ゆゞ進退尤便ゝゝんゝゝる故内室をその夜れ中よ起行せ迦はてゆゝとゆゝバ冠者と井平ゝ面を告てゝゝ共よ岩神ゆ。稲向許走けとてゝゝ太郎ゆゝ意ゆさせて遽しく出ゞゞ和慶のゝゝるゝゝ心もとなく思ゝバ。某暁ゝ歩ゝゝゝて来ゝ程よ果して謀る所よ違ゞ和慶ハ討ゝの大勢ゝゝゝ巻れ既よ危くゝゝゝゝゝバ暁よゝて捷徑を驀直よ走り近つ紀室平ゝを拉紀。

輙く救ひ給ひたる不思議の再会。素懐に稱ひぬと謝しくれて縡詳に説示せば。廣光いよく感謝に堪ず。原来浅良井小三二郎ハ越路へ赴きしかひし。亦是和君が恩澤によるなれども冠者ハ蚤く出てゆきしと答て加北へ赴きたらんハ和君の上日をすぐ。この地に到着あらで今この悔ハあるまじきをとつひろげく嘆を拊只管嗟嘆したりしかバ義秀も亦嘆息し天命必盈虚あり。離合に時あり人よくせんや。縁竭たれバ邂逅に亦冠者と環會なんこれも縁ての約束を違へじとおもひるバ再遊の後を要時も忘れ玉ひそ。其期に後きてあらバ亡父と先師の年忌にすなれバまづ下総に赴て間中の野寺に参詣し。そこの地へ来つる和殿主従図より邪なりし。さるにても今ハひとあしでえまする命を全して且く時を候ん。おハとかくなき蹤を暗まし脱去るよまいらせんのみ。街道より進んでハなる危き所あなれバ一両日ハ山路を蹈踵て岐岨路に出なバ子せうるべし。さのほど歓び給へそ。

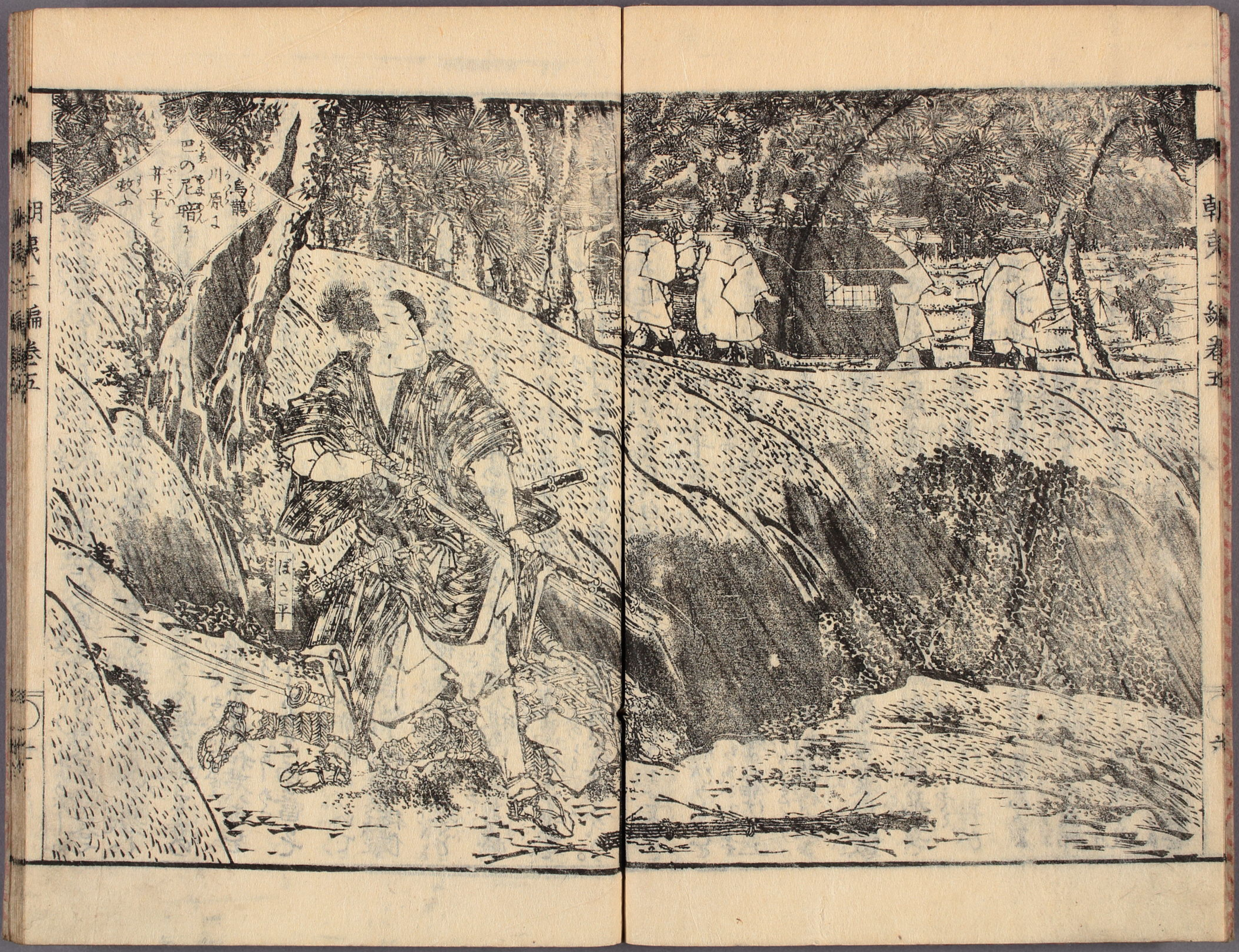
と慰めけれバ廣光ハ。言ば及バず感服して後おあり。又先に立つ推参給ぬ。山又山をかけのぼりつなく日を過ごして其次の日に下野岡亭に着て。鶯巣に歩しかバ早くそ岐岨路に趣ぬ。諸分両頭さても刀野時夏ハその曠昔に井平を志野のうちへ遣せし。夜ハ早二更に近づけども彼の者の還りきざりしかバ甚く心に疑ひつ生才学ある小厮を召びて。義郛が宿所の安否を竊よそて遣せしに且して走りかへりしかバいとく進しと。焦燥て果ならずハなきやと問バさいハ冠者よ今宵轉宅せしや女奴婢們。潜やかに雑具を出しけるを時夏きかそ原来それにて出挨拶て井平奴が告ぐるなりん義郛を走して八百針千慮あその詮あしのまがく遠くハ去べからず。然バとて目代に告領主の許に追捕の士卒を乞得さバ時移りて及びがたからんその方定らなる後ども夜を冒て去く客あきバ山路の險岨に憚りて奥街道へハ赴くべからず。狭野より勝澤田中を投て鎌倉道を追蒐たバ一宿が程中に獲

とあるべんべ。ぜくの井平ゑ忍とまるーと一大事をあくせーナを怨みれる死く
彼奴ハ生拘てく人創ゑして嘖ゑハ熟くる腸を冷ゑと死ゑ。馬ゑ敷おゑ松明の
准侍をゑ焼て焦爆く。野袴の裾裾を刀を引提く外面へ出れバ駆く
牽よ乗る馬ゑ内ゑとうち乗ゑバ。若堂奴隷五六人ゑれ後まと。と馬ゑ
引添ひ。喘くを後ひる。時夏ハ鞭を揚く一騎馳ゑ進ミて。挾野の船橋
ゑ渡て。足掻を駐やくゑゑるゑ。後僕一人も来ざりゑゑこの川より
あやゑゑハ五頭平ゑ隊下の野客ホ殿ゑ。河原ゑ烽火を立るとき。
怨地ゑ集合ゑん。豫て必つるとあれバ彼ホを漲りて援ゑせバゑと既ゑ
准侍を考てゑバ。馬ゑりゑてこの河原ゑまゑ狼煙をゑ立てける。
こゑとよりて彼此ゑ。散在ゑる野客ゑ。五人三人ゑ走る程ゑ暫時ゑ
三十餘人ゑ集る。時夏鶴ゑ欲びて。野客ホゑうち對ひ人ゑ言ゑこの

中ゑハ。ゑれを認ゑるものあるべ。ゑゑハ力野太郎と同郷の浮浪人吉見冠者
美邦も早蠅ゑ一味のあゑーゑ下郎井平ゑ漲られて心変ゑとゑる。渠ハ
舊恩あるゑあれバ領ゑ告ゑると叶ハぜ鎌倉へ直行せんとて今宵井平
共侶ゑ上野のゑへ走ゑる件の風声ゑゑも聞ゑて五頭平ハ忘野ゑ名も
なゑ土民ゑ生拘ゑゑ。既ゑ獄舎ゑ繋れる。ゑれ尉憤ゑ堪ぜと美邦
ホを撃ん。とあくまでハ追来れども如法夜ホして後僕続ゑ汝達ゑ
ゑれを資て彼両人を追撃ゑ。ハ早蠅ゑ為ゑ怨を復ゑん各位同意せ
ゑゑ。と嫌せバ衆皆大ゑゑ驚ゑ頭領捕ゑて。ハ吾們とその既ゑ
危ー切ゑくゑの吉見とゑん井平とゑ白徒を撃殺して退散せんと
一人ゑいへバ貪点頭ゑひあハゑとゑゑゑゑゑこのゑゑき夜ゑ続松もゑゑで。
いと賺ゑ行客二人中山道を投て四くゑんゑるハ今のことゑりき彼美邦

ホまあらざるもとゝを時夏ぞあへぞ。ありく疑べくゝべく追留よ。
と奬して再び馬ようち乗るれば時夏ゝ従僕ホハ槁をうさして走れり。
さゝバ進めと野客ども國より熟路のるゆゑ」バ所得兵器をゝ提て馬より
先よ逸足半して飛鳥の如く追進ゝ。さゝ程よ美邦ハ井平共伴通宵
急ぐとゝれど野平玉の烏疲ゝあゝバをのつゝゝ歩の運も果敢ゝ廣光
ホゞるゆ今さゝに心よゝれバいく遍ゝ後方をえゝ立留り候とハかよ小夜
深く暁ちくあゝ比よ猶下野の封彊をえゝれく挾野の津のあゝ勝瀬の
松原よ且く憩ゝ折ゝそあゝ」人駿散動ゝて美邦を逃ゝとゝ声遥よゝそ
ゝゝ」バ両人齊一立あゝゝ追捕の兵卒近つゝぬあゝて防戦ゝハ四く先
とても脱ゝゝんさゝゝて左右よ立ようれ。ゝゝ松を木陰よゝて刀の
鞘打垂湿し瑞ゝて」ゝ程よ真先よ進ゝ来ゝ。一下隊の野客十餘人冒燭

如ゝゝして走ゝ近つゝ估とんゝく。ホハ白徒ホハ。ゝよゝゝゝ。と
聞ゝて。独んとゝれバ美邦井平ゝを引抜きゝこ逆へゝ。競ひくるを
礮と砍り雜ゝよせて八丁と砍るゝ煉の刀光電光石火と晃ゝ響ゝ靡け一上
一下秘術を盡ゝて瞬間よ五六人或ハ大袈裟車斬真額梨割乾竹創よ
身首処を異ゝて仆ゝ死骸累ゝゝ。残ゝるゝのハこの勢ひよ吉を養ゝ遠戦
ゝく。蹈足さへゝ定らぬ。道の路ゝ凍解よ単皮脱あへぬゝの如横飛ゝて
逃亡ゝゝ。誘この隙ゝと井平ハ美邦をいそゞゝて刃を鞘よ納ゝバ再び
ゝゝ」人馬の足音程遠ゝゝ裏ゝゝゝ。井平騒ぐ氣色なく。某ゝよ
蹈留ゝて殺散ゝゝひゝん冠者ハとゝく延させゝと只管よ練ゝどの美邦
一歩も退ゝゝ。追兵ハ殊更大勢なゝんよ何ぞゝ和殿を捨死ゝて何国へゝ逃
隱るゝき。只共伴よ死ぞゝと進むを急よ推ゝゝ。貫渟ゝ策ゝ鼠ゝゝ


明東二編巻五
烏鵲川原より
巴の尼僧
并平を
救ふ
ほさ平

忌むとハいへど真の追兵なくバ其命を限りに禦ぎ戦ふ事あらば這奴等ハ烏合の野客也。由をもて備へあるがゆゑに隊伍つやく整はず。数十人ありとも殺散させんこと易し。願ふは途よりも時夏に駈催されしものなるべし。さればこそ由断をせざるべき案内知らるゝものあらば二隊にわかれて後より挟みて攻撃ならバ防禦ならびく難義に及ん和君ハあれを退却て鷹崎川にうち渉し二の目を戍りて俟ちてと誘る折しもあれ西に當りて蕉火の光隠くと見えくされバ美邦遙に是を見て原来後陣に亦敵ありいで撃とらんと幾びる三尺帯を揺締て刀を投てぞ退きぬ。浩処に時夏ハ従僕野客二十餘人にあく蕉火照させて驀直に追来つ烏夜に立在む井平を焼くと推とり巻せて彼生拘よと喚ばバ早雄の野客六七人合せる蕉火投かけて面もふらず喧て蒐ればバ井平ハ秒高き松の蔭に隠れつ顕れつ千変萬化の術を盡せ。いと烈しき大刀風に一隊の野客砍立られ残員を棄て退けバ刀野が従僕入かハり

後陣の野客も又共に又引包で撃んとせしを井平ハ美邦を延さんとのミ思ひしかバ撃刀を閃く揮まはして五六人を砍仆し頻に進で戦ふ程に野客等ハ挂りかねて只火攻にせんとてやがて道芝に火を放て風上よりぞ攻たる天さへ陰る暁がたに東南の風吹發りその火走りて井平が前後左右に煽かゝり縦三面六臂ありとも脱れがたく見えたる折しも颯と吹おろす風のまにまに驟雨頻に降きたりて盆を覆すが如く忽地に火をうち滅て黒白もわかぬなりければ井平ハ不思議の便宜を得て多勢が中へ割て入り衝と掛抜て息もつかず武蔵のかたへ走りゆく路を引ちがへし敵又蹤を跟て来れども美邦と間を隔て後れ遠く延させん為にと時夏も今さらに井平を撃漏して馬上に身を悶て鐙を蹴立て何処までもと追蒐しが雨ハますます降るほどに道のぬかるみに蹄泥みて馬上すゝまず後れたりける松明ハ蕉爆て消りつ鞭つ遣んとするに疲れし馬の癖なれば松の株に跌きて横さまに仆れければ…ハ

敷れて起もあがも。躬ハ只泥に塗れて當下従者ハ走り来て。声をあらべよ辛しく。
仆れし馬を牽起して主を勧めどもる程に田中の家に鶏鳴く彼雅時ありて
ふそ臣従ハ野客ハ矢の明方とも見えく。影薄くひえ疲員を肩にうけく。
あぶさ白く影をかくして再てあく集合ひバ時良ハ今さうよせ来べなれ。
今ハ懲もまよ従者を焚し我邦を漏もとも。井平ハ東へ走れりも這ハ
悲面もハ世の胡慮よなんのようや霎時ハ後さとも。烏鵲川のほとうあて。
追着んと疑ひ。若共続けとハ中をゆく歩より進めバ従僕ハ馬を牽ぬて追よ
程よ雨歌と雲ハ去ゆてゆく光ちくくさる程よ井平ハ東を投を走りて。
烏鵲川ハまで来よるとバ天ハ明ゆくと明ゆく隨ち雨ハ霽れども航人が
いぎさなくても航ハ前面の岸まで。追兵遠ハ行ふ安ぜまと。
ふれバ水際よ五六人轎子を輦ちて。

轎子の内ハ五十あまりの尼ハ客去ものとあぶくてそう泥ようつ
ゆる五六人ハ従僕ハ焼さうる蕉火を砂の上に投棄て蹴揚の泥を洗ひ
船と遅しと嗤くやり。井平ハ又これを見て嚮よ勝沢の松原より西ようて見えつる
火ハこの蕉火ハあるこへ来ゝ彼徒ハ人を憑ぶ遠く轎子ハ
ほとゝ近つき跪ぬく件の尼ハ対ひ忍辱慈善を宗とし中聖と見
ゆバ御蔭よ辛ようさむゝ。疑の追兵を殺脱て消あまぬ来つしなる。前面へ
渉もべうもあゝ後ハ追兵のいぞ来るあり先ハ舟人の資ゝ進退究ハ
あつも法衣の袖に匿して救せ。とうち歎けバ尼も亦つくくと見て安ぬうち
点阿十悪の罪人なれとも既に懺悔の心あゝバ仏の慈悲に漏ることを作況て
今見る所極悪の人ハあゝ縁故ハ来ゝ祇ども。いくまよあるゆ然
とて野渡のなまバ身の来ゝ隠も曲もこの轎子の内に潜びて前面へ

ゑさしかひ袖といと憑しくうけ引つゝ男八艇て轎子を出て床几より尻をうけ。
従僕よりろはさして濡まとる侭ゝ并平を轎子まで隠しゝ浩処ゝ時夏八
従者共倍ゝ泥ゝ塗れ行く喘ゝ追蒐来つ水際ゝ立く彼此を再三こびへんゝへまゝ
舟人八はまゝ然正しくあへ来つゝんゝ翔ゝ前面へ出ゝ出ゝ
あゝ不審と呟紀つ。轎子ゝ目をつけて立よゝんとする程ゝ尼の従僕推禁め。
こハ狼藉なり。鳴乎なりと。いハせもあへぬ冷笑ひ大罪人を舎蔵八出家ゝ
とも科八脱まじ。吾倍を指て狼藉ゝ鳴呼ゝとゝ汝ゝを狼藉めゝ荷擔者。
鳴乎の癖者なゝ心ゝれゝゝ疑ひ出ゝまゝあり。其処退ゝ出ゝやと勞ひ猛く掻除て
あんとゝ出ゝその尼八床几をゝ出ゝ遠く轎子の戸口ゝ立て遮り留ゝ八
あゝ泡ぬ土ゝ出ゝ家ゝして八門戸あり。途ゝして八轎子も亦是一家ゝ異
あゝ出家とゝひ悔りて狂縁故を告ぜゝ。ゝを告ゝ八狼藉なゝ

ぜゝ。鳴乎なる所行ゝ行ゝぜゝ。といハしく時夏もく逼立口さゝしくも
ほゝ。いゝ。然ゝ名告て呼せん執権時頼ゝ八所縁なゝ足利ゝ扶持
せゝゝ。刀野時夏とゝ名ゝ七命不義の家僕并平。ゝゝゝ逃ゝ
その影ゝ見んせゝゝ八。舎蔵ゝ出ゝゝゝ轎子の戸を引
ゝゝ出ゝ。釋ゝ出ゝ速ゝ出ゝ八後悔先。
いゝゝと敷厚八尼八戸ゝの顔を熟視ゝうち笑ひ時政ゝの縁者ゝ義兼
ゝの親族なゝ。武断ゝ拘らゝゝゝ寺法ゝ任せゝ鎌倉の古将軍頼朝ゝ。
言ゝゝ八ゝ。伊豆國蓋玉の女僧寺八三位頼政卿の後室ゝ出ゝ。
菖蒲の老尼住持ゝ。吾倍八尼公の弟子ゝ名ゝ。ゝゝゝ信濃國
川中島ゝ。善光寺ゝ代参ゝ。賽の路次ゝ寺法を枉ゝ出ゝ。
凡當寺ゝ入ゝ八不美亡命の男女ゝ。助けゝゝ定法ゝ八天子ゝ

咎めなハせ。又將軍も辭ひなバせ。執権國司ハさらなり。殿原どもの交ハんや。舍兄
さへ我の如く周ける吾儕ハ惡くぬとしぞ我を斷りても異淺からバ鎌倉殿頼家へ申して
あげて是非の裁許を任せ發又さが尼公へ披露して住持の隨意とるも許さん欲送荼
よりて許しがたし。けふ仇やと問ひされバ。時見ハ眼を睁られハとむかふも口隱て握る
拳のもへあらバ臂を放べて空しく座せず遂巡して頭を掻兒よりあきき疑心今さらに。
これから辭を失ひぬ私の怨みあらば官截ハ願しからバ。不礼ハ許し申へかしと只いよまし
轎子のこえを咎めて忍ぶ禁死人よりまづ疑ひハ釋ぜやと窘められて舌うち鳴し。
命ハ冥加ある奴ぞ然らバあの我別けさん衆皆共よとほく笑る。従者を疾視つゝ
ざしつ舊來しるしへ引きも打もおき航人ハ舩をあやさへさしよせてけり雷下尼を
轎子をそのまゝ船に扛入させ主従齊一うち乗て去りまに前面へさし隠て中嶋村の兵うっ
まそ又具く愬ひしかバ井平ハ遽しく轎子より立出て尼に對ひて叮嚀に再生兆

恩を辭し謝し。其實ハ岐阻路のかたへ赴くもので候へども。律侶ある扛役を延さんとて途
すがらへて來たれり。彼人のうへ心もとなし。自の眼をかつれらしといひ果て立んと
するを尼ハ急に推禁め同憂を相憐む信に。さあるべきことなれども刀野とやらん人を
跟てかく窺んも謀もなし。固より吾儕ハ使者なるに。既に和殿を舍匿ながら。
尼公へ申しあげずして放遣て又さらに追兵の為に内をあばかれなば越度なれど免
がれじ。とにかくにも寺まで伴ひ來ませと又々さしとむる尼公のあつきにまかすべし。伊豆
の六坊料ちなきども菖蒲の尼ハいとやさしき老年なるがもとひしが。孫駿河前司廣綱
朝臣心もとなく思食て宿所のほとりに草庵を修理せ。祖母の尼公を藍玉より迎
とり世を避ひて今ハ其處にぞをりしまゐ。廣綱朝臣ハ源氏の嫡流仲綱朝臣の嫡子也。
頼政卿にハ嫡孫なり。鎌倉創業のはじめより頼朝卿に従ひまひて五一族の寵
なりしかども世間を形なくおもひをりしが。建久元年十二月判官爵を棄妻子を

携へ武蔵國埼玉郡大田の荘に退隠して。遂に又仕へず。彩の年月を送りゐたりし。
吾儕が武義ありて大田の荘へくるまで。其迹まで。傳ひ伺ふんといふ。井平が緯の趾と雖義
が身を忘れ一旦危窮を救れるに辞せずして去るべうもあらず。彩とは。義邦の何
とうらびあり人廣光に諾ひ。こう言葉の終くまぎ乾るぬ。れのこをとう武義野の
うけうぐ花の陰に立ばよが迎水といられん心ーき限りそいうみせまじと思ひ果て。
さて已べきよあうぐれば。そう俣尾に後ひて。武義かを走紀るかくこの夜が熊谷の東南
の。屈の八町村に宿りつ。後僕臥薄に入り。尾が井平を召近つて。まづその
本貫姓名をとづ。又逐電せ。縁故又その友のうえを問へば井平が
あうくに匿してあーうなと。ひかるれば。藤を進めて首より尾りまでをうえを
説あり。又義邦のうを吾美秀ぐうへさへ。夜そをに拘ぐれば尾がぐ嘆息！
誠に和殿が痛。況薄命の人加以そ。友うを壮士達も大ぐるあーぬ枉屈に

身を厝うて。いくその患苦をもかん想像ぐふ哀れ伺。就くその美秀
とうの人が安房大瀬の浪人。朝夷と名告ると欲りその人の乳名を阿三郎
豊六とかん乳名が阿三郎とぐうのひとめのとをいうやーてあーせぬ。養父が浅江の
原来が不思議の縁こう。吾儕が只彼人の乳母菜をといひ。乳母君が
謂を冒して巴の尾とぐれ伺。と名告れば井平そぐも小藤を拍て驚嘆。これ
あるとぐうが秋び氣色に顕れて。感涙坐に禁あぐ。朝夷が物語して。
男子がもまきーせかん心操が豫てぐ。ぬ去歳のその月別れ時まで。彼人が六
歳前の姿方いうがと恵像そいひ出ぬ日が。ぐうを紀その垂乳母に。ひろみぐく。
危難を救れまう。俘ものが身を朝夷が。ぬ逃ぐれ。ぐうぐ逃ぐるぐ
再今の秋び八ーがまーて。珠更がそうべ紀に任せぬるのが有為薄変遺憾ぐ

おしばもべ死基とそも効少あり孤なりしへバ友垣結びしその日より朝夷奮を兄の
ごと。如く弟の如くやつのこ今ハ尼御前を母とそ思ひまゐらす子と喪し人孫と
いへバ頭をうつ振ていまそれハ僻ひあん棄恩入無為報恩者と佛ハ説ゃ
なる法の首途せし日より浮世のもハ忘れ侍り件の和子ハまゐ子なるぬ母といふハ
物休ゆ生涯面を對せるも恙おく幸ひあん忘れて年を歴しめそうこそや
人の言ひ葉ゆ伴されしあり煩悩の火坑ハ入らばいろあせん彼人も又如此あり吾倚が
朝夷奮ハ再会のと死ありとそも尼ぎうを告ぬ恨をあん抑吾倚ハ三年来
関の八州を徧歴し今茲正月の上浣菖蒲の尼公ゆ値偶し侍りて藍玉院ゆ
杖をぐめ此度信濃の善光寺へ代参ゆ立しゆハ件の尼公の本願ゆ頼政卿
仲綱朝臣八幡老道ゆ討死せし人々の菩提の為ゆ彼霊場へ三十三度参詣

せんと誓ひ侍いぬ治承のむしゆ年三十二度ゆ及べる今八なつかしい度
なれども九十餘歳ゆなりせゆへバ扶ん起居も不自由ゆ結願の義を遂ん侍
この年ものこいとくう歎せゆが痛しさ不代参ゆ尼公の扶ん殺袋法衣を
ぬい従僕ゆ駅ゆて晴ゆ旅を出ゆ侍り。ゆゆ勧進侍りゆ吾倚父国九州
彼此とゆく田國の初念を遂んとゆふし。かしハ扶ん身とゆゆ者しが程ゆ侍ゆ。
然るを母とゆハゆ子とゆへそ愛しく歎待れて八郎歎の森ゆ下ゆ赤袖濡を
媒ゆん戸国ゆゆく縁もなゆ尼法師とゆゆ侍ん送ゆ浅母せろゆ侍ん
叮嚀ゆ説示しろ健氣ゆ并平まゆく感激して坐ゆ耐愧ゆ堪ざるのゆ又慰ゆ
ゆく畏りゆゆ退ぬゆ。されバその次の日ゆ并平ハゆ真成ゆ巴の尼ゆ乗りゆ心ゆ用ひ
ざるゆゆゆく一宿ふして大田の荘ゆ藍玉院ゆ来ゆれバ巴の尼ハ院主の尼公ゆ恙ゆく
善光寺へ詣ろうをゆうえゆ。又并平ゆ縁の遠ゆ近ゆ告ゆせゆ尼公ハ殊ゆ

隣て召よせてこれを見るに面白く眉秀て瘢ある玉と見るまでよ傳平ある美男なるよ。
辯舌水の流るごとく才器ものづくよ顯れて憑氣多壯夜なれば尼公ハ甚く
愛こをゆひて且客房よ退せ巴の尼を旁ひて休足の暇をあり。別人をあ井平を
管待させゆひ。さる程にその夜さう。廣綱朝臣ハ例のごとく尼公の安否を訪ん
とて藍玉院よ詣来ゆひつ。當下尼公ハ井平ゞ繹の趣を告ゆひてその才貌を
稱ゆへバ廣綱ゆてうち微笑こ寔よ宜ごくあるバ能あるものよれん試ゆ
一見をべしとゆ呂せゆへうと他支もあく応ゆへバ尼公ハいあく欲ひて臂ちうに
使ゆ。介添の老女をこれ云云とゆ云ゆ井平ハ巴の尼よ案内
せしく廣綱朝臣よ見えを廣綱遥ゆこれを見て。媼子井平ハ汝ゆ薄命よ
才子なるよ尼公の老物語よゆつ。されも亦時よ遇ゆ年来村落よ退隱せ
ゆれバ辭歇絶てなし。鎌倉ゆもゆりしと狂狷世のゆもゆまわ。武藝文学

さゆあん長途の疲労あるべきゆ尼公も徒然よをりませバ夜ともよ潭を
明ゆ人誘はゆこへと呂びよせて四表ハ表物語よまゆその言辯応答を結り
試ゆ武備文事何れとゆ一ツ二ツ問ゆ井平ハ辭讓てみゆもゆぞとのこ
ゆゆもゆ。悔りゆ死と多ゆ。その才測るべうゆあ孤バ必ゆも嘆賞し。世ゆハ
ゆる奇才あるれ大國を領しゆバ学をゆうて佐とせん。數頃の田園小老を
養ゆ今ハしてハせんをゆ。ゆうハあれどもいかしへの賢人の迹をゆるよ。孟子ハ
褊小の滕國よ遊び武侯ハ西叟の蜀漢を佐ゆ。和殿ハ村落の一隱士を
厭ゆ且くゆよ留をゆ。ゆもうくゆも扶持をべ。いふうけゆべうゆと問ゆて
井平額をつき。御淀寔よ身よあまりて有ゆ死まで泰ゆ。江廣光よ
諾ひゆ。吉見殿の安危定ゆなゆゆ。件の刀祢よ辞せゆてゆよ待ゆバ郤心
苦ゆ死ゆぎよゆん且く身の暇をゆ。加賀の小松よ赴ゆて美邦ゆの安危を

ぐ。時宜よろしくて又さらに見参に入れんとぞ。蒙らばいよいよきものが幸と。入て請しらば廣綱はその信あり。義あるを稱て再び留めぐ。もしんかの力及ばぐ。よりや加北へ赴くとも美邦あらば彼処よりあり。今さらに定めがたくるべし。彼人はあのよりあくば直ちにまをさへ者よ他よりを寓ぐ怨こんとてもかくても後れるよ。一両日ハ休足してやるやうに發足せよ。ぐも遠慮の趣舎心中亮察あるべしといと叮嚀ゆえさせく衣裳一襲を贐し。菖蒲の老尼も共侶よ名残を惜せめどぐ。既よ城をあらなぐ。十日も安居せべ紀ゆあれば。ぐ加北へ赴紀く吉見冠者の安危をもくば。又當院よ参上て。御恩を報ぜん。かくハ明暁發足と思ひ決てゆと潔く咎ヤせバ。廣綱はその意よ任て。更よ留別の盃をとらせて又拍ぐうがうなりて。鶏鳴暁を報る程よ井平ハ恩を謝て。客房よ行装し。巴の尼よ別を告て。もう北國へぞ起行る。

作者云。足利より挾野へ赴くよ今の順路を推紀。新田木崎太田八木。梁田川崎凡七驛を歴て九里あまりなるべし。挾野より上野の舘林へ二里。この間よ船橋らくせし跡あるとぐ。高崎の東方。勝澤田中のほとり。西ハ丁ぶ。又足利より武蔵へ赴くハ上野と武蔵の封彊方。神名川まで四里半。挾野よ出てハ多くよ遠し。ちうれども彼津ハ大和ゆも同地名まり。古歌よんえて。いとも名ちる舊蹟あり。むりしハ京よ上るゆも鎌倉へ赴くゆも件の船橋をもちしとも。當時の順路なるべし。余ハまぐ親しくとの地を踏よあるぐしハ遠近方位を詳よまぐれども。途よ新古の差別あり。又その地名ハ存ぜれなるの蹟むりよ異方あり。今ままで古蹟を辨し。道路の順逆を定さるのぐ彼柱よ膠して。琴を鼓さるごとをいはまし。

初輯第二十

綱總袴の游偵
假装束の情郎

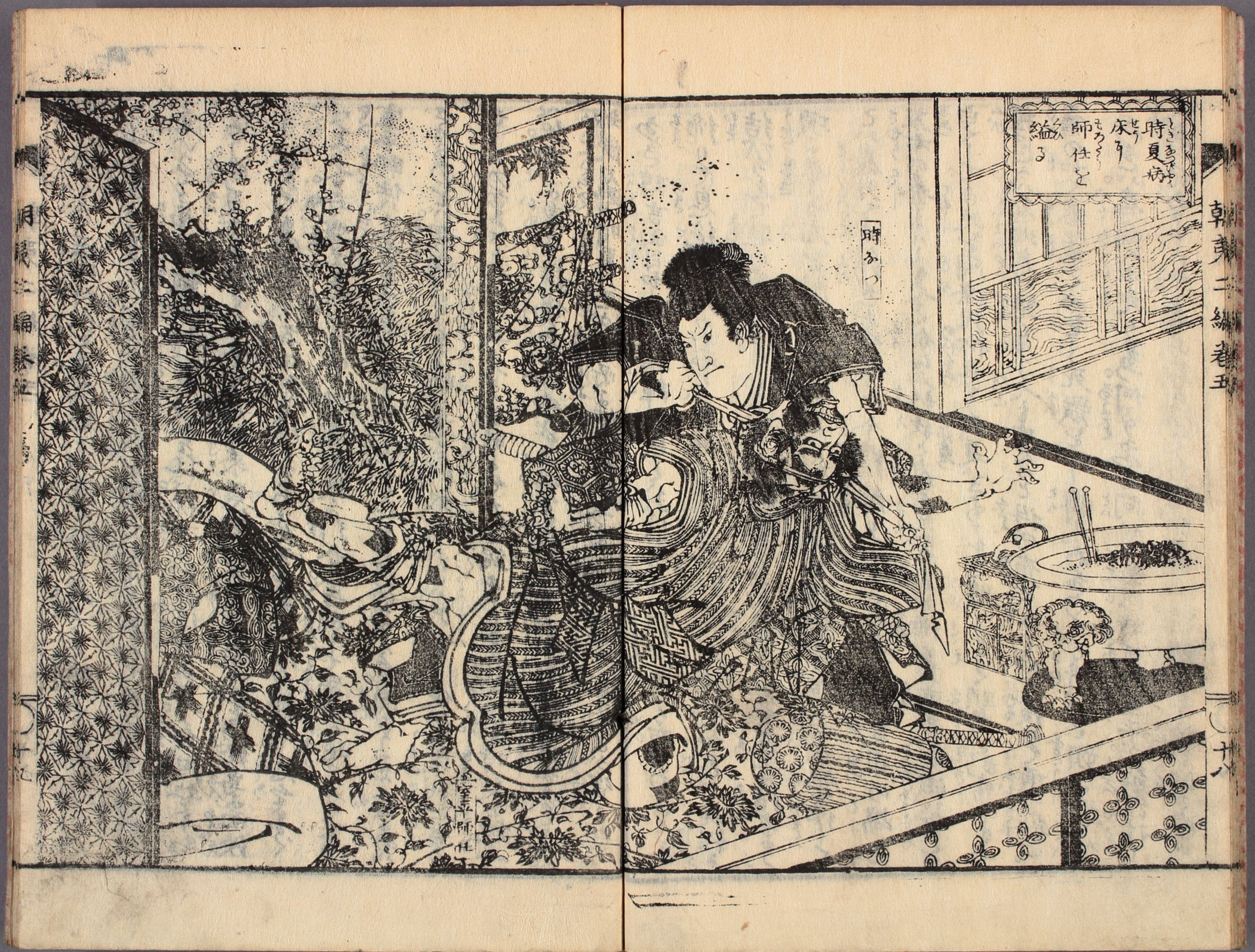
刀野太郎時夏ハ巴の尼ヲ説破せられて憤ヲ堪ずもとる。又いふとるせんべるれば。
おほ疑ひハ釋然ども。軈て其処ゝ敗てうへ。日ゝれてやうゝく帰宅つ竊ニ人
遣して。吉見の為体を窺せしに彼宿所へその曉ごゝ月代八嶋室平師任五十人の
騎兵を引て。先ゝと推寄せう。留守ハ廣光ひとりなり。討ものの大勢と血戰して雑兵
許多ゝ殘を負。その身も刀折き力究て組布をる折ヲ。ひしひしとく彼朝夷が
忽然と援来て師任を投折て雑兵ハを搞仆して。金竹叢へ投棄て廣光
共倶逐電して今ハその往方を知ども。かくて師任主従ハ筋骨を打折られて
足あれども起ることあれども携るまゝく舌あれども物ハ言ずして。
守屋が家臣萬なり。ねど半日あまり藪ヲ箸して半死半生なりなを知ども
絶ておうう後ゝくて又加勢の雑兵二三十人ゝ来り。主の往方を索うて。
こゝくして数の中ヲ仆ることを足て驚騒だをゞまく疲員を復ヲ兼て宿所ハ
舁入ることゞる程ヲ死ることの過まゝそゞ中ヲ師任ハ項骨をやゝ腰骨を
うち挫ゲれ臥房ヲ扶入られつゝその苦痛いべうもあゝゞ。節くハ布ヲ巻せ
皮膚ハ巻て膏薬をゝゝゞとゝ所もゝ蹴鞠の如く腫あゞと葡萄の如く
痣つゝて。蛇の息のごとくよう。然ども命ヲ恙ゝ。ゝふハ横ヲ臥て苦。飯湯
をゞよく嚙るとゝ時夏これを窺あゞ呆ることゝ半晌ども。謀ゝこのくまでヲ。
なりも果ゆゝのゝとゝやのゝ中ヲ中ゝ膝を抱て嘆息。あゝ肺肝を
摧けども計策をゆざりしゝゞ軈て臥房ヲ入るゝゝ。通宵いも伝ゝゞ稍暁
うとヲ熟睡つ疲ゝ果ゝゝゝゝゝゝゝ。覚ゝ比ハ亭午ゞなゝぬまゝハ嶋室平が
病著を問んとて鬢ゝき拭く衣裳を更め奴隷只初ゝをゝて。ゝゝ宿所ハ
出紀ゝゝゝゝハ病床ヲ身入れてあゝゞハ臥て對面ゝ現縛の為体ゝゝゝ
いやまゝゝ。當下室平ハ着病人ハヲ扶ゝて。累ゝる横ヲ背を倚ゝ刀野

ぬしなどて遅れやされし朝夷に拗られて尪弱不具のものとぞなりぬ他友ハとまれかくまれいまで君が訪もあざれバ憑し気なくもひもみおる説あやと怨ざれバ時夏愧て面色ぞいふ某ハと回答かりく看病人なをさんらへまべ。室平ハそのところを得て奴婢なを遠く退せ刃野なし汚穢とも誘こへ居よりあへと招くまゝに膝を進めて後方をさんでて声を細め某ハこの夜さり義邦を追蒐て遠く藩屏を超しかバこの大変を絶てあらぞきの日暮れて帰宅なれバ予の見参遅きにおもぞその故ハ如此〻之箇様〻と井平に讒逆始より義邦逐電の為体労して功なく神名川よりかへり来つる終までおちもなく演説し。某その夜井平が還らざるに疑ひ起りて義邦が逐電をやゝ推察なしけれども猝急なれバ目代に告て加勢をこふに及バず一騎馳に追蒐て勝澤のほとりまで井平を追留しが天ハまだ明ず烏夜なれバ某馬を

乗延して天のあがる捕へさざりし残念さよと侘しそ今思ふごとくなりし八室平きゝて嘆息し追蒐て捕ゆるぞよし和君が如く悪なくハこれにまさる幸ひし彼朝夷が武藝勇力古今独歩とよぶべき歟渠天よりハよも降らじ又地よりして涌ても出じ図らず当所へ来つるもの歟又援んとて埋伏あるやいづれかあれど人にして鬼神よりもなほ悍く四十餘人の雑兵さへ彼奴ひとりに結果れてされ彼朝夷ハ領主の武威に憚らず其に刃をぬるおそれげもやなされ師任ありぬて。足利殿へ吉見冠者が罪あるよしを申せよと又時夏が卜緒に與ふる密書あるよあり汝らし先非を悔くバ已が為に許く時夏が隠慝を顕せるをいふまじく後くへも来て汝が頭をとるべきぞ項骨によく覚よといふてまでハ耳に入るしが朽もしくも気絶してそのものゝ去るをぞ宿所に扶入られし頭髪に結のあるとみひつ人々にとゞせてこれを見るに彼卜緒に與られし廼和君が密書なりも亦

朝夷が結び着たるもの。これなんぞんかへと、ひらけく枕の下より一通を取出して示すに
此時時夏ハ忽地に顔色変りて応せず。室平頻りに嗟嘆しつゝ和君何なる遺恨あり
てか朝夷を殺さんと計りしよしハ、あるべき筈なし。師任がこの苦痛ハ喧嘩の側杖撲れ
ものへ、ふるゝを、ふに五頭平が義邦をもて党と指ても證拠ハなし。抱ぞとおもふ
ものろ更に忿ひぬ再三び五頭平を問もおとさで只管に早やもしとの悔しさよ
と呷ゞまーく呟けハ時夏呵々とうち笑ひ女々しきことを宣ひそ。この一通ハ偽書ぞ
其団より朝夷を怨ることを絶てあらし。何でふ法師を刺客として殺さんと謀るべき。
これハ和殿に疑せて某を陥れんとなすも謀る朝夷が反間に疑ひなし。くさる
伎倆に乗せられて義邦さへに五頭平が證言あらんとおもひ、かつ我身の病著に心
さへ弱り果て、日ごろに似げなく、ひとくいひと辨に任して闘ふのこゝろハ更に安からず。
肚裏にハこの人をまづ結果んとおもひうちぞハ、おもへりて室平ハ安ひらへてうち点頭し

あゝき諤言面目なし。汝相譚なきことハ、おれらも項の疵を巻たる布があまりに
締りて息絶ハしく緩やぞやとかみを掴みバ、時夏獨りにあらう鈍びのが其が衰程に
結びたるぞて進らせん。許しゐへと遽しく蒲團のうへに膝をすゝめて室平が後方より
項に巻たる布を解きかゝるを、あくいひ欸と問て結びたる程に室平眼を押して
こハ意外なり。汚さずや。願くハ今些し締りてもよくいへバ、時夏布の端を
左右の手にとくまとて力らバ緊けて強かに力を竟充めて居と締めバ、室平ハ呪滅込目を
白くして手足を悶掻死仰反ぞり。時夏ハさあらむと膝に支へ頸骨を碎くまで
縊られバ忽地息ハ絶てその人もやらんと件の布をほどやく緩めて項の疵を
舊の如く巻蓋くやをさらし死骸をおし搏し、あなやくと叫びて頻りに人を呼
べるまにバ看病人が走り来つ。何ぞあやと問ひも果ず時夏ハ室平が死骸を指し
大息つきあるかしハ今まであくちよげにらち撲ひありつ瞬間に詰て仰きれに


時夏
床り
師仕を
縫る
時夏

仆れ見るもとく医師許人を遣しや。まづ湯よ水よと喚さて城しやうふ勧めバこハ
いうぬと驚き辛さ死亂宅の男女數を鳴して臥房よ集合て異口同音よ呼甦れ
どもいうぞう届うん鍼灸補写の致あるれバ枕方よまう後方よまう食潛然とう
泣あう時夏も鼻をちらりて幕年来目代とハ莫逆の交あうよその終焉よ面談
せしハせあてあるぞうし。各位愁傷さぞあらん所要あらバう仔やんし心ままく
哭え更と叮嚀よ慰てその容書を袂よ入全告別して宿所へ退をぬさても
室平師任ハ近曾その妻みまうるもて子ともをなうりろを閨よりまが意よあハ
ざろものをバ親類うりをも疎ミ遠ざけ。奴婢わをバ只苟く使ひて栄利を旨と
せしものあまくハその賂兵さえうる時とて力を竭せとあれバ誰う時夏を疑ふ
べ。貌寃よ重き撲傷あまバやろて墓あくなりろうまとぞハさうあ死あうるなう。
却説刀野時夏ハ色が宿所よ還りてて又つくくと告ふやう室平ハ色が資よなる
あれとのミ云ひしよ渠尚これを疑へまとの故よ絞殺して後やもくもろあのうら心よ
かゝるハ五頭平く襄ふされたる手與して彼進物を畧らせしハ諸ひし密淺の術
あさま且くその餌を與ひしさうれども嗛らぞやおほ當國をさち去らせ。
いと果敢なくも土民ふよ生拘れたる癡漢あまバ継救ひねうとるいく程もなく
又生拘られて呵嘖よぬ堪ぜこがうへさへよ首伏せることのやわらんと云ひよ
あまバ這奴を威して四境よ守兵を置るれバそがまくよハ脱れがたし。いかで
苦肉の計を行へと欺きもてやく憎しと云ふ我邦ふを陥るく囮よ一つ具代許
牽あそ由紀しハ後よ救んあめるで這奴を賺して自滅をとらせ一旦
與せしこがうへを世よも人よも知らせじとそさて云云よ計をしろど師任
既よ死くあまバ領主より別人あそ又五頭平を鞫問せられんのしそのさびよ
彼癡漢が箇様くと実を吐バまれも脱る路ハなし。若覚ざる前ふそ。

ともかくも思べからんと心をとゝのへ決めて密かに准備しつゝ夜深く宿所をたちぬ。師住の敷地なる獄舎のうへ潜びあるゝ雨蕭こと降そゝぎてこの夜殊に暗うなるに乗内知ることなきゆゑ築垣を乗踰て裡面のようを窺ひこの日師住死らしゝ。食忙然と呆れ果てその務を缺りの多くなるゆゑ時夏は和殿を救ひ出さんなるよ。嘗ざる獄卒さへ怠るゝ人をとゝも護めあるゆゑ時夏竊に欲びく。獄舎の戸口より列を潜ま早蠅こと吸うられば裡面より五頭平誰と問時夏凡そ簡子を敲きさハ紛りて時夏之和殿を救ひ出さんなるよ。竊来つるをあゝざるやとゝいふ五頭平搔拐かゝ戸口より居より透て。憑ーや力野ぬ。れ繋れるその日より心まちのこせしても獄紀所なるよ。あゝざれいふゝとゝひつるゝ前諾を違ぶてゝもも竊来ゆゝと今さゝ感謝は堪ざるのこさてゝふゝて脱ぬんと簡子よりをゝ密語ば時夏ゆゝてされ

ゝよ救ひ出ハ難くもあゝ孤ど今些時早々を獄くあゝを脱去るゝ夜ゝを遠く走ゝてふゝくゝ蹤を埋めハ絆完ーとハいふべゝゝ餓てハ特は難美かんん且兵粮ゝを肝要なる空ーく時を移さんより腹を造りて出ゝと真実ゝちく懐より焼餅をゝ出。簡子の間よさ入ゝて遞与せば五頭平まゝ

まも欲ひ送るゝこなゝ紀和君が懇切なゝでは賞翫せざるべき時よとゝてハ百味の珎膳齢を延る仙丹之痩る肚は実を入ゝてまゝるゝ出んと件の餅を引ちぎゝ嚙りて旨ゝくと息をも吻ぜ食ひ竭ーて胃を拊今ハゝや絆足ぬ。頓くハ一碗の湯を飲ゝやと戯るゝ舌も始ゝゝ五頭平ハ苦と叫て仰ざるは倒出んとゝて膝組締あゝ紛ーや彼餅肚は充ゝ忽地は五臓を役る大苦痛ゝり毒薬はあゝゝるゝやとゝへバ時夏冷笑ひ通五頭平明察なゝ。ゝれ我邦ゝをゝ逃ーつ師住は疑ゝ計ゝーゝハみゝ齟齬は趣舎

うきむかれば汝ごろう機密を洩されし。吾倚よ崇あんぐと後先ふくまて
安らぐばよりて目代師任を霜よ絞殺しうかくて汝を毒殺せれば機密をあるを
あるを。竟よ脱ぬ命ゆをと諦てもゆ死ぬ悩搔ば苦痛をまたこのを怨
不便のあるやと涕貌よ説示されく五頭平ハ驚ぬ怒まて簡子よ携ふ起んと
をへ轉輾び悶ゆるむ必死の呼吸をのれ時夏冥土の伴侶啖著くこの怨
後さでやと敢園声も漸くよ細る篭竜の鳥。猛きあるも弱りて檻よ鬱繋
ぬ。膝折伏て息絶う。時夏ハ外面よ立在て窺ふよ既ぬて氣息ぬれば
莞爾と笑て足ぬよ奮来りるよ退きつ又塀を踰笹を潜るく竊よ
南所よりへまるう。かくてその次の日よ室平ぬ親族縣兵ぬ領主の館へ参りて。
師任ぬ病死及五頭平ぬ頓死のよを訴へ。義兼ぬて眉を顰め逆徒義邦ぬ
逐電しぬいまぬ往方をもるざるよ師任ハ深痍よ没。又五頭平ハ禁獄の疲労ぬ

落命せしとへバ穿鑿の度を失ぬよ似う。され刀野時夏ぬて彼顛末をもり
つゝめ嚮よ来つるとあれば太郎を召て問へ師任ぬ徒ハ且退出よとてうへれ
ろう。さる程よ刀野太郎時夏ハ俄頃よ領主よ招れていと晴やかぬ衣裳を整へ
ぬや告文所よ来よるるハ義兼聽て對面して五頭平を生拘るそのゆの為体。
義邦逐電の縡れ迂曲くよ問ゆ毎よ時夏憶まる氣色なへ言を巧みて
詭り飾ぬ井平義秀廣光ぬも皆修羅五郎経任よ一味同意のあるをいひ達
義邦を追とめんとて勝澤の松原ゆく苦戦せしその夜の形勢又五頭平を
生拘るその日よ縡の為体ぬ紀るをあはあり良よ辨佞利口よ任しつ彼を
貶して我を褒め國の為よ力を竭し。亡父の汚名を雪んとて死をぶも辞せぬ
彼徒を搦捕んとせしぬ如く言委をく答う。義兼愚将よあくされども。
刀野ハ親く吉見ハ疎うを良員とハかるよその言ぬ理あるがごとくぬれば説

迷されて感嘆し。親にハ遂立なき両愛られ壮佼ら此度和殿が誠忠ハ。鎌倉殿頼家へ上達せん今いふ所の如くなるバ彼義邦が徒ハ是返逆の餘類之渠が支黨なほあるべしそのひくに穿鑿していよく忠勤を励みへあるらバ本領安堵の日遠からじ御制度あるなん年来扶持せしそれさへに面をさらハこの時も努よくせよと褒奨して時夏を退せこの日鎌倉の営中へ騎馬の使者をもてかゝせる件の倅の趣をおちもなく注進も第三日の暁に因幡介廣元の奉諭に執権時政の下行書を相添て義邦義秀などを追捕のす。骨相書をもて速に國々へ徇しらしむべし又時夏が忠勤の為体いと神妙思召循礼明を遂させて勸賞の沙汰あるべしと義兼に下知せる時夏これを傳へ聞てなくなく笑てそねたるが案下某生再説并平ハ義邦の蹤を慕ひて加賀の小松を心ざしていそぐとすれど途遙なる客宿をかさねて。

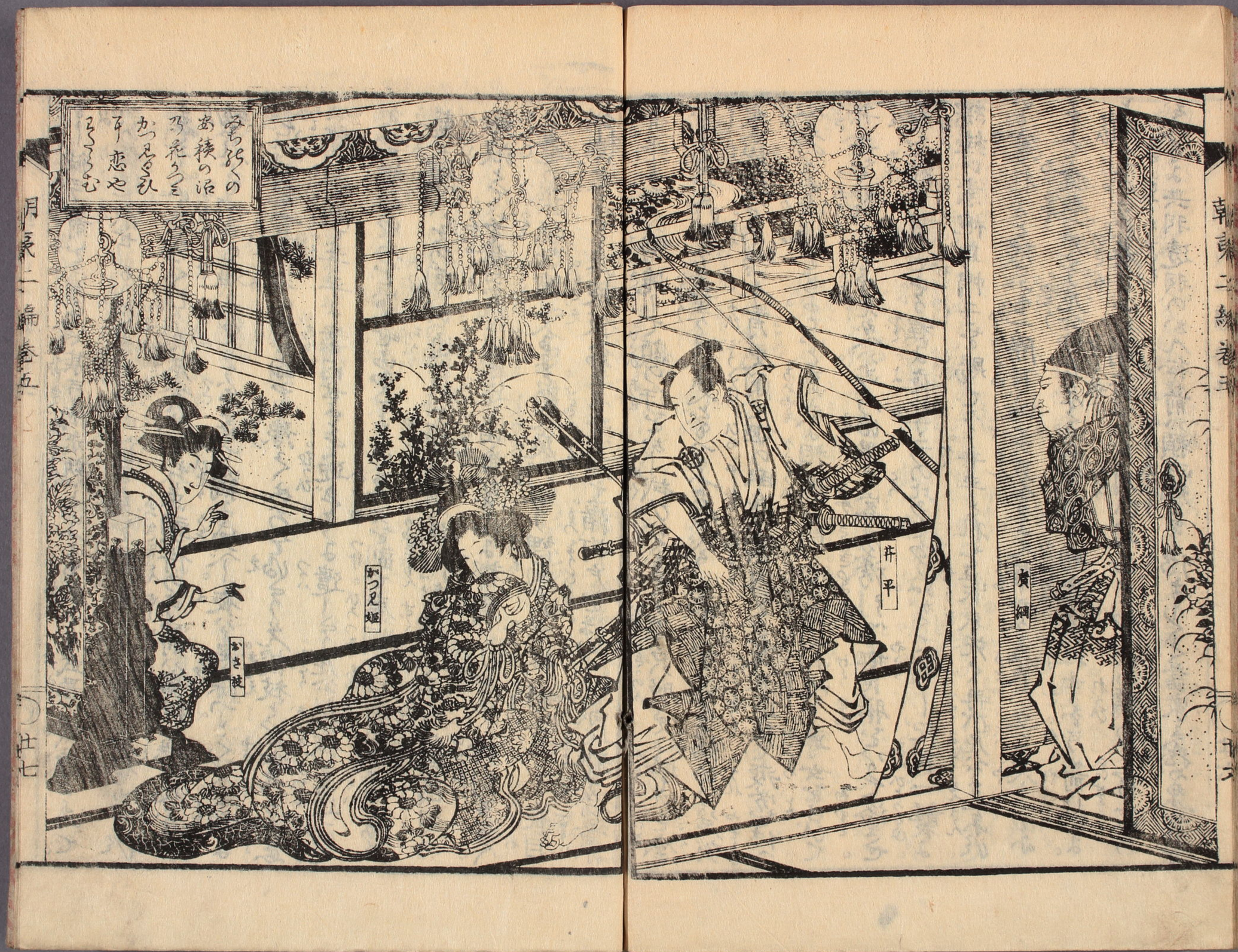
日ごろ歴てやうやくに佐味の竺内が宿所を訪ぬ年より柳営頼家に親しく仕まつりて在鎌倉とぞ聞えたるそのあるじもし家にあらねバ誰彼とて義邦の安危を其処にたづねあるべきやうもなかりけるハそこだのあそいふともせんすべなし此ころよりして街衢に義邦義秀いへばさらそこが骨相書を掛られて穿鑿厳重なりけれバ驚きおそれて其処を立退き他し郷に立よれバまたも又こが骨相書ありとかゝれバ彼人々ハさも因徒となりぬひしう又山林に身を躱して蜂静るをまちなりたる欵穏に蹤を慕ひ徒に徘徊せバそれ赤綱裏の魚となりぬべし駿河前司廣綱朝臣ハ年来退隠しぬへども鎌倉殿もしらねバ本ハ一族の上臈に彼刀祢などへ身を寓なバ冤屈の縲絏を脱れもせん異にハ安ひろけなくに菖蒲の尼公の愛顧を蒙り廣綱朝臣に見参して恩讎さへになかりし再会の契ありなバ明く地に危窮を告て憑にするもよしと

尋思つ姿を変はとそ[illegible]尚消残る北國の雪を踏て山路を辿り辛くして越路を過りて信濃上毛國あまくく起てすゝ露を宿る野中の月を友とし聳仰そよく風を流りそハ世を[illegible]水鏡ゝ影さへも曇りさらぬぐゝ旅ハ悲しきものなるを草も木も心あらぬ虎の尾を踏む恐懼患難比さを[illegible]あらハあれど恙なくその夏四月十日あまりを武義國大田の荘なる藍玉院を来著を比丘尼寮を起起く竊を巴の尼を問て云云といひ入るを寮ハも怒るものありて遽しく出迎へこゝ　くを多うあへぬ巴の尼ハ三月の盡を豫ての志願なれバとて院主を別を告まゝ又國ゝを廻んとて何処とハなく出て去ぬ彼尼今ハかゝるも院ゝハをうく扶ん身が[illegible]ゝをいふくと想像るまで俟ゝびくゝをハもやうとくあるゝ　草鞋脱して客房を誘引ついと叮嚀を啓待て尼公をかくと告あらせバ且く疲れを休ゝくねて[illegible]れとそ命ら。井平ハ巴の尼を追あはざるうあるゝど。歓待ぢ来弥まゝ。ゝと憑ゝ紀を心ぢ[illegible]て敢亦疲労を厭ゝ繊る裳ゝ紀年。件の比丘尼ゝ後を跟く菖蒲の尼公を見ゝを當下尼公ハ井平ゝ前諾を違へゝ。ゝく。[illegible]ゝを襃させく恙ゝ。と問ゝバ井平ハ恭ゝく寒暖を述無異を祝ゝ。ゝを義邦の往方ゝを追捕をさく嚴重を骨相書をゝて索らゝ。ゝゝ又人のゝ客宿の悪難日夜の恐怖彼とゝく此となく酒やうを告ゝ。犯る罪ハゝれども有繋を命ハ惜紀ものを慚を忍び姿を窶ゝ人条を入るゝハ喪家の狗ゝ人を媚び窮鳥懐を入るを似ゝ人欲命運竟を脱しゝく。搦捕ゝものゝゝバ亦是尼公の慈善をゝゝん末期の十念条をゝく来世を安くせんを再び条りてゝと思ひ沈て演ゝゝバ尼公ハ笑て嘆息ゝ。そをゝゝハ紀ゝゝ。ゝゝあるゝを當院をゝゝ足を入るゝハ罪の重紀ゝきを

問ぜんかの刑罰を脱れんと法衣の袖に掩ひてもいそぐ大赦の時まあハせんふりく潛てねまんとふ憑ーくぬえあの冥加に神を祈るまで井平ハ感涙に堪ず告るまーあ。ありがたのーあくバ亦義邦をもこの処に置まほしくそびゆる且くーく菖蒲の老尼ハ左右の人を遠ざけて井平をほとり近く招かして声を潜め。和殿がうへ尼が諸ひつ尼が憑を伯ることう。けるる欣いかぞやと問して井平一議に及ず其既に再生の大恩を蒙れり犬馬の労を盡さぜいづれの日か徳に報ひん仰付さぜいへと勇氣を含て応ーくバ尼公ハ歓び大うこなーバ。然らバ匿さぜ告伯ーんとが孫廣綱に一個の女児あり且見姫とぞ名つけるる。玄孫ありそを待るまあねど容止醜ーーバ心操亦風流う。敷島の道に長けんそハ曾祖頼政卿の口調を学び管絃の技を嗜ませハ大叔母代柴加賀が有ぐ似り。青春まだ十八歳いまだ嫁せる暇なく伯ーぜ深窓に異なることもなーしに曩に和殿が加北へとて。辞ー去るもの比あるぞ只何となく病ひづくひて茶療医術も效なーこの月に迫るそハ狂ーきるまえて。夜とそ安くハ睡り伯ーぜその癖の為休物の怪などのあるべーるれ。廣綱ハ風涇の病著あり。五十保の温泉に湯治せんとていぬる月の下旬上野へ赴ぜるその留守にて姫が難病さればとてもなくと廣綱に告るとも。武士なるものが他ぜるるくいぞう勝て還る忘れ。そハおのくに尼ぜ恨ん家に三人の花堂あれども下河邊小三郎高吉頼政の郎等下河辺次三郎上野へ赴ぜつ。間中隼人守直猪隼太守資が本貫遠江に赴ぜくいぬぐ。高僧験者のをを借んハこれも亦他ぜるるくて廣綱があるに稱ハ只明暮に拍を尼が珠數もて禳へども。癒るべうもあるぞ。和殿ハをさく武藝に長ぜうんどころあるめと廣綱ハ贈るれいぞ蕎目の弦に襖ゆく。

物の怪退治をあらべ。己ふまを幸なし。憑むとふこのるべうけうあへと他度も
ふく。説示されく井平ハ因果る頭を擡。とうけかうゐひぬ。ぬんゐごふあうん
ふ火を踏る刃を握るも。推辞まうへ紀よあうゐ。武藝未熟の某かどが情る
墓目をよくせんや。特よ家ハ近衛のちん時。内裏あうく怪鳥を射ふ頼政卿の
子孫ゑ刀祢ハ左こもかぶ。氏もかぶ紀下郎とて弓箭のふみ與らバ孔子の
家よ道を備ど。釋迦の墓よ法を説く。況よ惟く嗚呼ゑゐいんゐ已をもうぬと
いふも過うう。この幾ハ汗させゑへうと。辭を竭て固辞せしかど尼公ハつやく
汗ーゑ。ぜいるくそれ人をゑで身を脱るの辭之名たる兵ふくバを。射損じうる。
と紀恥ともへゑ。すや和殿ゑ者をんでうとも。誰ら拙ーとそ笑ふべき。固より墓目ハ
修法よあうて正鵠を射ふのあうぬよそのふをでよ学びぬうるくバうくもあうぬ
所行ふべーー。老るゑよ和をいーくうこて紀人のうろやとうくを良ある諺士ふ。

井平まもく慚愧して額の汗をかーー拭ひかくまぞよ思呂ハ脱るよ路もひ〜を盛
かさるうれふうる量ぐさくいへどもつふまうるべうゑとやうやくよ諾ひーがバ尼公ハ
爻よ欲びつ尓らバ今宵更闌て姫の臥房へ案内をそゑん且退紀て疲労を休へ
心ぞうふ准備をせよといと真成よ相潭ゑひつ堂高く打鳴ー専女を呂びて
井平を如此くと堅えゑへ。ふくろ汲果て客房誘ーうく郷食膳をうて浴させ
髪を結させかどもる程よ夜ハ子二ッの比ゑをありぬかくて新ー紀衣一襲よ
縹縄の素袍烏帽子を賜てうー井平これを装束紀く再び尼公よ入系況
いと寞れうと紀ざふも一際目うう英男ゑるよ又華やうよ装ひ立て八ーゑふ
まて愛敬つ紀う尼公ハうちゑくうちゑ笑を通。愛う紀壮士ゑ弓箭ハいろよ。
と問かへバさいふ墓目ハ。滴箭をて用ひへ。ゑよそうの願あう。雷上動の
ちん弓よ兵羽透羽のちん征箭ハ頼政卿よう偽ーくー。當家よ発ゑゑあん。


みちゆくの
あやめの沼
乃花ゆえ
かつるる我
身恋ゆ
えくるむ
かつら姫
おさき姫
井平
廣綱

もし彼弓箭を貸あらば某弓術未熟といふとも名ある武器の威徳によつて物の怪退散せん欲慮外の所望よ身を顧ぜいと憚ることかれ。まづ御くひとあるくをーゞ尼公ハ笑て点頭件の弓箭ハ廣綱が殊よ秘蔵の物なれども何ぞも姫が為とうけ玉させて竊よ貸べ。夜ふかく深つとくくと頻よいそげ立ぬ且見姫の方ざまも豫くまろをゆうえん梭枝といふ女房よ若堂奴隷を相副て井平よ案内せよとそ迎ぞうよ遣しこう尼公ハ梭枝を呂近つけて。おほ文緯のまろをゆさせあやつりも專女を副て廣綱の宿所まぞ遣しみふ。藍玉院とその間いと近ければ程もなく衡門を進入るふ有繫國司の餘波とそ茅葺みだ家造り田舎なづくりよ都備こう井平ハ誘引まいく。左邊の築垣を遶り入るふこの廷庭門あり裡面ハ名樹影あるべし。夜目かれば定なるゝ梭枝ハ先よ走て。諸折戸をほとくと敲く程よ女の童ハ紙燭秉しこう老女出て井平ハを迎入を廊より母屋ハのぼしてこれ彼よ挨拶せ。その管待よろづ密やかそ男子こうあの老女ハ竊よ弓箭をもて来つ棗を解て胡籙をかしー立て井平がほうへさーよせ見あん雷上動の弓翡翠透羽の箭よ付り物の怪ハ丑と寅の時の間ハ来ふと待ぞ彼ハ所用あるハ女の童をゆせ申と慰めて食奥

弓箭をもてあげてかしー戴れつゝくるよ尋常のうちよりこうるー瀬よ立ぞハこの弓この箭を取るよ。ーと云へバ心よ勇あるよりや悪霊妖怪ありとも漏さゞるものと弓投衛そ且見姫の寝所とおぼしき一室のこゝろよ掛こう翠簾をふんをまぞよみ進て通宵ぞう護りてまう。この段特よ長物なれバ編を嗣巻を更て第三編の初よ解文出像あるよ餘異を色こう。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之五終

編述 曲亭馬琴稿本

浄書 荏土 千形仲道 棚加正臧

出像 一柳齋豊廣畫

彫人 京 攝 六剞劂合刊

春王正月 文化四丁卯歲 吉日發兌

江戸馬喰町三町目 若林清兵衛
筋違御門外平永町 山崎平八
大坂心齋橋唐物町 河内屋太助

○江戸著作堂主人隨筆並國字小說畧目 浪華書肆 文金堂藏版

あゞ佛の記 隨筆大本 六冊近刻
この書よ名つゞ婆女の筆をゝみゆもあゞ佛ふとゝと いとも仏ハおゞ仏おれどもとゞ持仏の祠よそゝくおぼゆゝハ 人欲の私ぞゝよゝとの徒子も文ゝなりとゝゝゝ誠めゝゝゝゝ

里見八犬傳第二輯 全五冊 去ル子十一月より賣出し申候 柳川重信画 八犬士のうち犬塚犬乃犬川莊助が列傳ゝゝゝゝ

朝夷巡嶋記第三編 全五冊 来寅四月一日より賣出し申候 歌川豊廣画 奥州厨川の經任退治より起りて義秀鎌倉よりかへるまで終る

燕石雜志 隨筆之佳說奇談多ゝ 全六冊

俳諧歲時記 四季の詞細注便覽の一書ゝ 全二冊

月氷奇縁 以下ゑ入よゝ本 全五冊

新累解脫物語 北齋画 全五冊

昔語質屋庫 春亭画 全五冊

松深情史秋七草 豊廣画 全五冊

曲亭家傳神女湯同精製奇應丸同婦人つゞき虫妙藥并ニ曲亭画賛扇ホ取次仕ル